

[普及事項]

新技術名： オウトウ雨よけハウス栽培に適した樹形「下枝強調変則主幹形」

(平成11～15年)

研究機関名 果樹試験場栽培部栽培担当

担当者 森田 泉・嵯峨 清 他4名

[要約]

オウトウ雨よけハウスの高さを4～5mに抑え、作業の安全性確保と早期多収・高品質を得るための樹形として下枝強調変則主幹形が適している。

[ねらい]

オウトウ栽培において雨よけハウスは必須施設であるが、慣行栽培の樹形は自然開心形がほとんどで樹高が高く、ハウスも7～8mと高く作業は危険を伴う。このため、高齢化が進む中で、生産拡大を阻む大きな要因となっている。そこで、ハウスの高さを4～5mと小型化して作業の安全性を確保し、低樹高で早期多収を可能にする樹形を開発する。

[技術の内容・特徴]

- 1．下枝強調変則主幹形の主枝は、4本を目標とし、オウトウ樹をハウスの中心に栽植して各々の主枝はハウスの隅柱に向けて整枝する(図3)。
- 2．下枝強調変則主幹形の主枝の発出位置は、地上1.5～2.5mの間とし、南東方向を最も低くし北東方向へ螺旋状に配置する(図3、4)。
- 3．主枝候補枝選択は、3年生時から行き、主幹と競合しない太さの枝を徹底した誘引によって整枝することで適正な樹勢に誘導され、4～5mの高さのハウスに収めることが可能になる(表1、2、図3、4)。
- 4．適正な樹勢の判断として目通りの高さの新梢長の他に発生する本数も基準となり、1～2本が適正数である(表2、図5)。
- 5．主幹から発生させる主枝以外の枝は、花束状短果枝の形成しやすい落ち着いた枝を選択することで主幹上部の枝の拡張を抑えることができる。
- 6．主枝を幼木期に誘引し樹形を構築することで、樹冠内部の受光態勢が良好となり、良質の花芽が形成され収穫時期が早くなる(図6)。

[普及対象範囲]

県内全域

[普及・参考上の留意事項]

幼木期(未結実期)について

- 1．この期間は、頂部優勢が強く現れやすいので、6月初旬から主幹延長枝に競合する新梢をせん去する。
- 2．主枝候補枝は主幹の太さの1/3以下の枝を誘引によって整枝する。

結果期以降について

- 1．人工受粉を徹底して行き、着果による適正樹勢への誘導も合わせて行う。
- 2．適正な樹勢になるまで、主枝の延長枝はせん定時に1本にはしない。

[具体的なデータ等]

表1 樹形別の樹高及び樹幅(2004.7)

樹形	主幹高 (m)	樹高 ^Y (m)	樹幅(m)	
			列方向	株間
主幹形	3.5	4.6	5.6	6.2
開心形		4.5	8.3	11.3
下枝強調 ^Z	3.6	4.6	6.3	6.6

^Z下枝強調変則主幹形

^Y当年伸長した新梢の先端までの高さ

表2 樹形別の新梢長及び本数と葉色(2004.7)

樹形	新梢長 (cm)	新梢本数 ^Z (本)	葉色
			(SPAD値)
主幹形	30.2a	2.1a	46.5ns
開心形	13.7b	1.0b	45.2
下枝強調	29.7a	2.2a	45.2

^Z新梢長を計測した2年枝の先端から発生した新梢の総数

表中の異符号はチューキーの多重比較で有意差有り(5%レベル)



図1 主幹形



図2 開心形



図3 下枝強調変則主幹形



図4 下枝強調変則主幹形(モデル図)

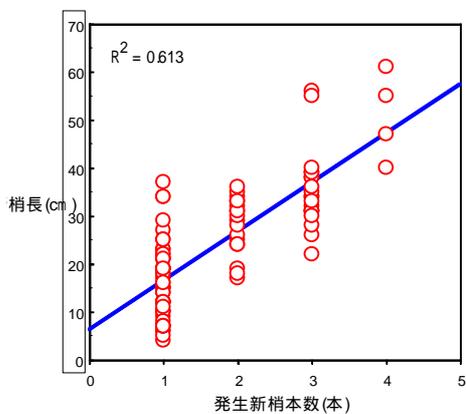


図5 新梢長と発生本数の関係(2004)

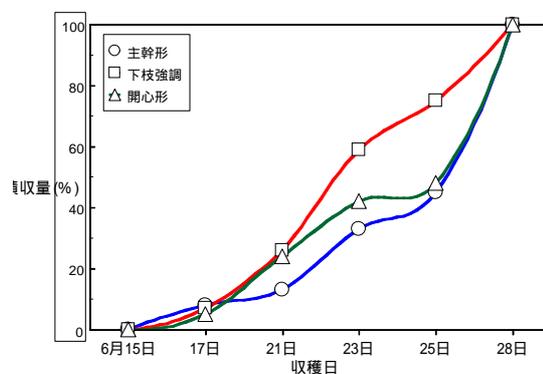


図6 樹形別累積収量の変化(2004)

[発表文献等]

なし